

幼稚園実習について(I) — 日常の保育に参加しに折の記録から —

磯部 景子
(山口大学)

はじめに

山口大学の幼稚園教員養成課程では、子どもが活動している場面で具体的なことからととして子どもについて学ぶことと大切に考え、三年生の前期の教育課程に、幼稚園、保育所、養護学校などの実習や見学を設けている。(週に一度全日もあつた)

本発表は、その中の幼稚園の保育に参加した折の記録からとりあげたものである。

幼稚園の保育に参加することは、昭和52年度より実施してきたが、57年度までは午前のみ保育に参加していた。58年度から子どもが幼稚園に来て帰るまで保育に参加し、午後の保育のある日は、学生も弁当を持参し、子どもといっしょに食事とすることにした。

幼稚園の日常の保育に参加し、その中で学んでいることから明らかにし、幼稚園実習のあり方を検討する。

研究目的

保育者と子どもがともに活動したり、子どもどうしで活動している場面に、学生が参加し、子どもとともに活動する中で、学んでいることから明らかにする。

研究方法

1. 記録方法と記録の扱い方

学生は保育に参加した日に、保育が終わったその日のうちに、保育に参加した中で感じたこと、考えたことを記録にする。記録されていることからとりあげ、同類のものとあつめた。

2. 幼稚園名

山口大学教育学部付属幼稚園

3. 参加学生

山口大学教育学部幼稚園課程3年生 27名

4. 保育に参加した日

第1回 昭和58年4月27日

第2回 昭和58年5月11日

第3回 昭和58年5月18日

3回のうち、3才児、4才児、5才児の各クラスに参加する。

保育終了後、学生全員と話し合う時間をもつ。

研究内容

記録の中からいくつかの例をあげる。

不安について

幼稚園での自分の居場所について不安

4月27日 4才児のクラス

どのような位置にどのような姿勢でいればよいかわからなかった。クラス窓のそばについたらいいが、先生や子どもの立場になって考えると邪魔であつた。

子どもとうまくやっていけるだろうかという不安

4月27日 4才児のクラス

今まで大勢の子どもに接することがなかった中で、幼稚園に行く前はとても緊張していた。子どもとうまく接することができるとか不安でいっぱいでした。幼稚園にフリー、子どもたちが登園しても、自分のことで精一杯で観察するどころではありませんでした。

子どもの活動をみて怪我をするのではないかと不安になる

4月27日 5才児のクラス

5才児のクラスに行くと、子どもたちは活発によく動きまわっていた。子どもたちは平気で遊んでいるが、「危いよ」と、たびたび云いそうになった。

子どもとの応対について

4月27日 4才児のクラス

女の子が、お姫様の冠を作りながら、いろいろなことを訪したり質問しました。質問の場合は何をききたいのかということばかりでしたが、子どもが満足するような応対の仕方がわからないう。私に説明したり教えてくれているらしい時は、その子どもが何をききたいのかよくわからないう。子どもと話すことはむずかしいことだと思いました。

4月27日 5才児のクラス

ことは自分の思っていることを表現していた。中には、後から身体ごとぶつかってくる子どもがいた。このような子どもに対しては、何を望んでいるのかわからなくて、どのようにしていいのかわからなかった。

5月18日 5才児のクラス

園庭で遊んでいる間に、いつものように、2、3人の子どもが、競うように同時に話しかけてきた。いつも話をききたくてもきけなくて困っていた。「一度に言われると、全然わからなくなるのよ。一人ずつ話して」とほんとうに困って言った。子どもは納得した

らしく、ひとりずつ順番に話してくれた。初めてうまく対応できた。

子どもの活動について

○4月27日 3才児のクラス

もう、走ること自体がうれしくてたまらないという感じに、部屋の中をかけまわっていた。

○4月27日 4才児のクラス

まだ感じにことは、子どもはとても元気で動きまわることが多いということ。

○4月27日 5才児のクラス

子どもに「鬼ごっこしよう」とさそわれて鬼になった時、ただ、ただ子どもを追いかけて。私の想像した以上に、子どもが走るのにびっくりした。

子どもについて

○子どもはひとりひとりがうらやましている

5月18日 5才児のクラス

朝、子どもが登園して、靴を置くのを見てみると、ひとりひとり置き方がちがう。挨拶の仕方、しゃべり方もひとりひとりちがっている。

○ひとりの子どもがいろいろな面を持っている

5月11日 5才児のクラス

今日はひとりひとりの子どもを見ることにできた。

朝からKはとても機嫌がわるく、積み木を投げつけたり、私たちを追いかけてまわったりした。そして、いつも何かにおこっているようだった。それで私はKを困らせた子どもと見てしまったが、子どもたちを見てみると、そう思っていないようだ。Kはみんなに慕われていた。帰りの挨拶が終わって、皆が帰りにした時、KとYが走って来てくれた。KはYがたれた靴と帽子をとって「ほら」と渡してやり、また二人でかきかへて行った。Kのやさしい一面をみた。

子どもとともに活動して

○5月11日 4才児のクラス

外で遊ぶ時はだしの子どもが多い。私もはだしになった。久しぶりに足の裏の感覚に気がついた。靴や靴下にくまれた足では想像もつかない感覚に新たに驚いた。砂の上、小石の上、葉っぱの上、芝生の上、コンクリートの上といういろいろな感覚が伝わってきた。小石の上や、あらう石の上では足の裏が痛くて歩くことにためらいを感じた。しかし子どもたちは平気であった。

○活動の外見と中味

5月11日 5才児のクラス 園庭中をつかって活動

私はこの日の大部分を園庭で過ごした。子どもたちが庭中で自転車を乗りまわしている。子どもが「ガソリンスタンドはどこ？」と私にきいた。「まあねえ、どこにする？」とたええと、「手洗い場にする」という。やがて鉄棒のところが駐車場だということにわかってきた。

(外見は自転車を乗りまわしている様に見えるが、(駐車場やガソリンスタンドがあふことかわかっている。))

○1日の中での活動の展開

5月11日 5才児のクラス

庭中で自転車を乗りまわしていた子どもたちが、石段に座っている。その中のひとりが目の前に生えている草にまわりながら私に急に「あぶらむしってどこにいるの？」とたずねた。子どもの鼻、からずのえんどうの茎にずうとあぶらむしがいたことを思い出して、草むらにいるかもしれないと思い直した。「じゃあ、あぶらむしを探しに行こうか」と云って、園庭の草むらに探しに行った。はたしてあぶらむしはからずのえんどうの茎や葉についていた。その子は「あぶらむしってこんなところにいるのか」と、あぶらむしをじっと見ながらつぶやくようにいった。それからあとは、からずのえんどうで笛をつくった。子どもたちが入れ替り立ち替りやっていたが、笛は笛づくりに熱中していた。笛はうまくいかなくて、やがてからずのえんどうの豆をいっしょうけんめい集めた。家に持って帰って鉄砲の玉にするという話だった。

(動きまわると活動のめど静かな活動、虫への興味、) (笛づくり、豆あつめと活動は展開した。)

○活動の伝わり方、広がり方

4月27日 3才児のクラス しづめ草で草すもう

ひとりの子どもとしづめ草で草すもうをする。喜んで何回もやる。その様子をみていた子どもが3人近寄ってきて、同じことをやりはじめる。特にこれといった会話はなかったが、うれしそうにひばり合いのすもうを続けた。

保育者の判断

○5月18日 5才児のクラス 亀山への遠足の途中で

子どもたちは歩いているうちに長い列になってしまった。そのために信子と渡す時、青信子でも、みんながそろそろまで待って、次の青信子で、手をあげて渡っていた。私が渡せたら無理やり子どもたちを走らせたのではないだろうか。